

このネットワークの考え方は、参加館の対象業務と処理量に応じて、端末、ミニコン、大型計算機を置き、本部の電算機と直結することになっており、非常に融通性のある部分分散処理の形と言える。

米国の地域図書館ネットワークの形式は早く、自然発生的に生まれたので、これらのネットワーク間や各種情報処理機関との調整を目的として、図書館・情報科学国家委員会が設置され、1975年にはその報告書が出された。これは情報を国家資源の一つとして位置付けし、地域・階層の差なく平等に利用できるようにすべきであるとし、このために電算機・通信技術を利用し、各地域ネットワークと情報処理機関の秩序ある発展を促し、それらを結びつけることによって全国図書館ネットワークの形成に向かおうとするものである。以後、米国議会図書館にネットワーク開発部を設置し、同委員会と共にその目標に向かって精力的に研究・調査を行っている。

以上のように各国の図書館の機械化は個々の図書館単位の機械化ではなく、相互協力を前提とする地域（専門別・館種別を含む）図書館ネットワークの形成と共にそれらを相互に結びつける全国図書館ネットワークの形成に向かっている。

我が国においても国立国会図書館で1968年から図書館ネットワークの重要な役割を担う JAPAN MARC の事業が開始され、同館に納入される新刊書の目録データが全て機械可読の形に入力されるようになり、昨年12月には同館の30周年を祝して、「図書館ネットワーク」をテーマに国際シンポジウムを開催している。日本科学技術情報センターでは昭和44年に出された NIST (National Information System for Science and Tech-

nology) 構想を受けて JOIS (JICST On-line Information System) を完成し、1976年より公衆回線を通じて全国各地から医学文献・化学文献等の二次情報のオンライン検索が可能となった。大学関係でも昭和48年に出された学術審議会学術情報分科会の「学術情報流通体制の改善について」の中でその基本的な考え方が打ち出され、その具体的なシステムの在り方が大学図書館改善協議会相互協力専門部会・機械化専門部会によって検討され、昭和49年にその報告書が出されている。このあと、東京大学の TOOL-IR (Tokyo University On-Line Information Retrieval System) と筑波大学の IDEAS (Interactive Data base Easy Accessing System) が完成し、公衆回線を通じ全国各地から各種二次情報のオンライン検索が可能となっている。昨年暮、文部省は学術審議会に対し「学術情報システムの在り方」について諮問し、学術情報処理システムの確立及び一次情報の収集整備とその利用体制の高度化等が検討項目となっており、共同利用体制を基盤にした学術情報処理センターを中心とする図書館ネットワークの可能性も出てきた感じである。一方、東京大学情報図書館学研究センター長の藤原鎮男教授を研究代表者とする科学研究費による「大学図書館の情報処理トータル・システムの開発」が進められており、我が国の大学図書館のネットワーク化の夢も非常に現実性を帯びてきた。

今度の海外出張を通じ、内外の図書館をとりまく環境の急激な変化を目のあたりにして、この変化に対し、京都大学の図書館としてどのように対応すべきが今後の大きな課題であると痛感している次第である。

図書館60年の回顧

谷口寛一郎

大学図書館史として始めて刊行せられた「京大図書館60年史」は思い出の多い重要な図書である。第30頁に大正7年図書館略図が載っているが、煉瓦造りの事務室（現教育学部図書室）の竣

工した時で私が始めて出勤、記念展観準備の手伝いをした頃である。渡り廊下で北へ続く木造平屋建は医科大学から移したもので北側3室は法科大学図書室（後の法経図書室）、南側の事務室は図

書館控室，目録掛室，LCカード分類目録室であった。LCカードは米国議院図書館から本学だけに寄贈されていたカード5枚連刷の最終校正刷で専属の製本店で裁断し排列していたが嘱託1名で始め，後に掛員4名で著者名排列カード昭和18年残分を完了した。西側の物置は乾倉（いぬいぐら）と呼ばれ，受贈外国雑誌等が収蔵されていた。東側の閲覧室は間接照明によるもので卒業式場にもなった。教官閲覧室には湯浅画伯模写のヴェラスケスの「官女」が北面一杯に掛けられていて，始めて見る名画に感激した。

大正3年，新村出館長がA. サトー氏旧蔵の「耶蘇会年報」122部を購入された時，私は始めて貴重書を見たのであるが，後日私もお手伝いをしてE. A. トラウツ独逸文化研究所主事が編纂せられた「Bibliographischer Alt-Japan-Katalog, 1542-1853」にもこの「耶蘇会年報」はJ 1:2-1 L* (1~122) として収録されている。



京都帝国大学附属図書館 昭.9.9写

旧
閲
覧
室

大正12年に農学部が設立され，私は購入図書受入のため派遣せられ昼夜兼行で送状と図書を困難な状況の下で照合した思い出がある。次に理学部に地質学鉱物学教室が新設せられた時は大量の図書が図書館へ搬入され廊下の片側全部に高さ1米まで雑誌バックナンバー等を積上げた。同教室の図書室は壁面全部2層の書架であった。昭和6年にこの天井から出火，昼間だったので図書は短時間で南の空地へ持出されたが，そこへ消火用放水が流れ込みすっかり水浸しとなった。至急図書目録が必要とのことで図書原簿から抽出作成するこ

とになった。出入りの一書店から応援を申出られ20数台のタイプライターで3万冊の目録を作り上げた。焼失図書調査に私が派遣され，少年1名を採用し水浸し図書の乾燥，泥落し等2ヶ月間寒中ガラスの落ちた室で残存図書を調べた。当時教室の小火が相次ぎ図書館は被災図書の処理に追われた。そして昭和11年図書館に火災が起きた。新聞閲覧室との急報で，駆けつけたところ室内は異常なく天井裏と西側壁面内に火が走っていた。数日前の豪雪が溶け始め，屋根の隙間から水が配電盤に落ち，発火したと思われる。学生達は椅子を頭に図書を返し避難，私達はこれらの図書や法経指定書，教官閲覧室から百科辞書等を書庫へ運び天井の落ちる寸前に避難したが，2名が負傷，職員1名が書庫に閉じ込められた。

避難後気付いた西園寺公書「静脩館」の額が，学生により持出されていたことを知り感謝感激した。現在この額は本館閲覧室の壁面に掲げられており，また本誌「静脩」が今健在な由縁でもある。

焼失した閲覧用カードは，1年半かかって30数名で事務用カードから作製した。この時始めて標準型カードを使用，記入様式等も改善された。事務用カードは昔ながらの小型でその記入は不統一，殊に団体記入が定着せず公共機関の報告書や学会紀要等が書名記入で分散していた。その頃読んだM. アンの「目録法序論」で「Union list of serials (逐刊書合同目録)」を知り購入してもらい照合を始めた。青色カードに同目録の記述を写し，カードを整頓し乾倉の受贈雑誌を受入，また法経図書室のカードを同様に統一し，逐刊書2万種20万冊が一覧出来るようになったので，紀元2600年記念事業の一つとして刊行せられることになった。昭和5年から昭和18年迄途中火災復旧の5年間を除き13年かかった。これと並行して大賀寿吉氏収集の世界的ダンテ文献3000点の旭江文庫が寄贈せられ，黒田正利講師の方針で第1部ダンテの著作を作品別刊年順，第2部ダンテに関する著作を著者別に，編集などについては新村猛嘱託と私が従事，昭和16年目録を刊行した。

戦中は北京の燕京大学を接収してできた総合調査研究所図書館に赴任したが，散乱した大学の図

書や学生の私有物等で歩行もできないほどだった。最も驚いたことは、昭和16年に羽田亨京大総長の依頼で芦屋の故貴志弥右衛門氏の蔵書目録作製のため、土、日曜日に出向いて1年半かかった想い出のその図書が買上げられていたことだった。それが私達の願いも空しく整理もされず終戦となった。勝手に持出された燕京大学の図書を極力集め返還したことはスチュアート総長に喜ばれ、図書は賠償目録から除外されていた。

戦後京大文学部図書室に勤務し、定年迄18年間

を過ごした。退職後1年程アメリカ研究センター図書室に居ったが、地階で湿気が多く、図書に黴、床上に地下水の溜りができ、2台の除湿器も追付かないほどだった。北京では乾燥した空気で図書が乾物のようになったが、図書にとって湿気は禁物である。

本年は京大図書館創立80年となる。私も同年齢、本館の栄光と発展を祈り老の繰言を述べさせていただいた。

(附属図書館元職員)

—— 図 書 館 め ぐ り ——

原子炉実験所図書室

原子炉実験所は、昭和38年4月に設置された比較的新しい、全国共同利用研究所である。

研究用原子炉(KUR)及び、臨界集合体実験装置(KUCA)を中心に、工学、物理学、化学、生物学、医学等の研究分野の教官80名(研究部門数16)、その他の職員109名で運営されている。その他、所外からの研究者も年間延2500名が来所している。

図書室は、研究室、実験室等のある研究棟3階にあり、はるか大阪湾をへだてて淡路島や六甲の山波が望まれる。その面積264 m²には、閲覧コーナー、書架、雑誌架、事務コーナー、複写室等があるが、近年の資料の増加でその収蔵力の限界に達している。現在、単行本4,300冊、製本雑誌10,800冊を配架している他、研究室に8,700冊貸出されている。雑誌は和文誌211種、欧文誌322種を受入れしている。さらに、原子力関連分野の技術レポート、特にアメリカ原子力委員会(AEC—現在は改組)及び内外の関係機関のレポート(いわゆるレポート番号をもっているもの)を所蔵している。

二次資料による文献検索も多く、Biological Abstracts, Chemical Abstracts, INIS Atomindex, Physics Abstracts, 科学技術文献速報等の抄録誌もよく利用されており、他機関(日本原子力研究所、国立国会図書館、他大学及び学内)に対する複写依頼も年間500件に達する。

図書室の一隅には複写機(ゼロックス4000)2台を置き、月間2万~2万5千枚の研究用及び事務用コピーが行われているので、これの人の出入りも多い。この保守管理も図書室が担当している。

当実験所では所の出版物として Annual Reports(欧文一年刊)と Technical Reports(和文一年10~15冊)を出しているがこの発送及び保管も行っている。

閲覧席は以前は15~6席あったものが書架に追われて現在わずか8席に減ってしまった。

最近の科学技術の進歩、情報量の増大多様化に対応するため昨年から「原子力科学情報センター」設置の構想が検討されている。これは、従来の図書室の整備、延長にとどまらず、情報機器を駆使して科学技術情報、特に原子力関連分野のデータ(例えば核データ、物性データ等)の収集、検索、評価までを行うため研究部門も置いて、この分野の大学における中心的位置を目指すものである。

例えば、過去1年間にCAに収録された文献量は40万件、INISのそれは7万件に達する。これらの膨大な情報を検索するため多くのデータベースが開発され、我が国でもJOISによる検索が軌道に乗っている。こうした世界的趨勢に対応し、大学の研究所としての情報収集、検索活動のあり方を考える上で、このセンター構想での論議